

# 再捕調査による人工アユ種苗 2 系統の特性評価

福島県内水面水産試験場 調査部

部門名 水産業－内水面（増養殖）－アユ

担当者 寺本 航

## I 新技術の解説

### 1 要旨

アユ人工種苗における系統ごとの遊漁資源としての特性を客観的に評価するため再捕調査が行われているが、単一河川、単一年度の調査結果からの評価しか行われていない。そこで、2018年度に引き続き、採捕調査を行うことにより、複数河川、複数年度の調査結果から種苗特性について再評価を行った。その結果、人工アユ種苗 2 系統間で釣られやすさ及び残存しやすさに差異が確認された。ダム湖系は漁期前半の釣れ具合が良いが残存率が低いこと、海系は漁期後半の釣れ具合が良く残存率が高いことが明らかになった。

- (1) 2019年5月に小田川及び野尻川に上下限にアユが遡上困難な堰堤が存在する試験区を設置し、ダム湖由来人工種苗（ダム湖系）と海産由来人工種苗（海系）の2系統を各200kg放流した（放流密度：小田川0.48尾/m<sup>2</sup>、野尻川0.18尾/m<sup>2</sup>）。ダム湖系は脂鰭を切除し標識を施し、定期的に友釣と投網による放流種苗の再捕調査を行った。
- (2) 両河川とも、ダム湖系の割合は投網より友釣の方が多く、ダム湖系の方が釣られやすかった（図1）。海系よりダム湖系の方が投網による再捕率が低く、系統間で残存率に差があると推察された。友釣、投網ともに、ダム湖系の割合は経時的に減少する傾向が見られた。
- (3) アユの全長は経時的に大きくなり、系統間で全長に有意差はみられなかった（図2）。投網よりも友釣の方が大型であり、2018年度同様、大型個体ほど縄張りを形成しやすい傾向がみられた（図3）。また、小田川よりも野尻川の方が大型であった。
- (4) 水温が最も高くなる8月上旬に小田川において、友釣により再捕されたアユの全長に定点間で差がみられ（下流から順にSt.1-5）、2系統ともに上流ほど大きい傾向があった（図4）。

### 2 期待される効果

- (1) 漁業者が目的に応じた系統の種苗放流を行うための基礎資料として役立てることができる。

### 3 適用範囲

- (1) 福島県、アユ種苗生産者、内水面漁業協同組合

### 4 普及上の留意点

- (1) 漁場ごとに河川環境が異なるため、事前に最適放流量等の検討を行う必要がある。

## II 具体的データ等

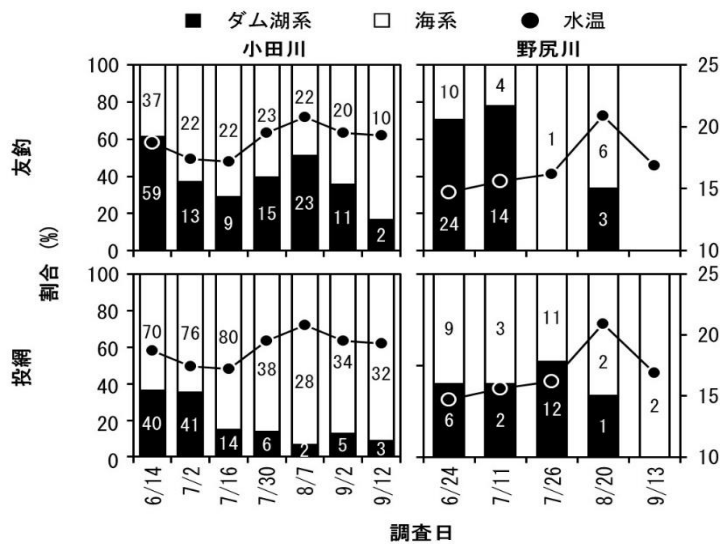


図1 再捕されたアユの系統組成と水温の変化

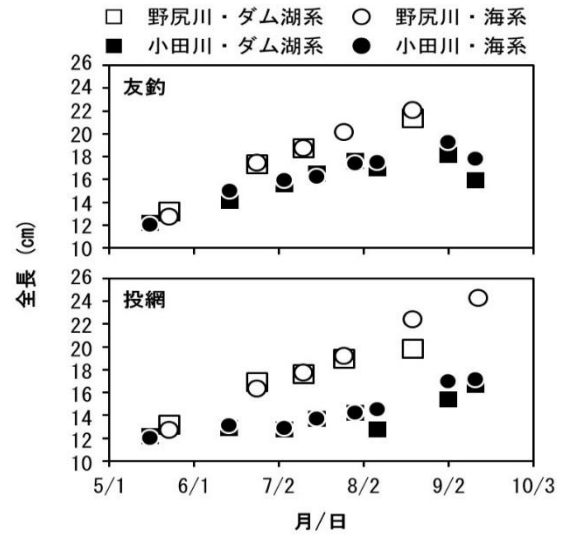


図2 再捕されたアユの全長の河川・系統間差

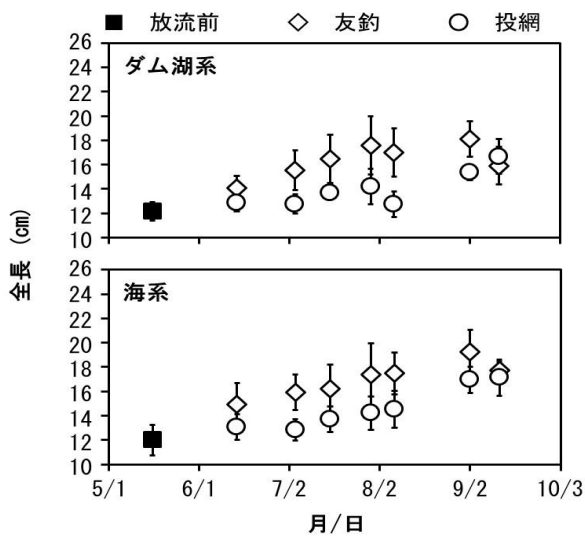


図3 小田川において再捕されたアユの全長の漁法間差

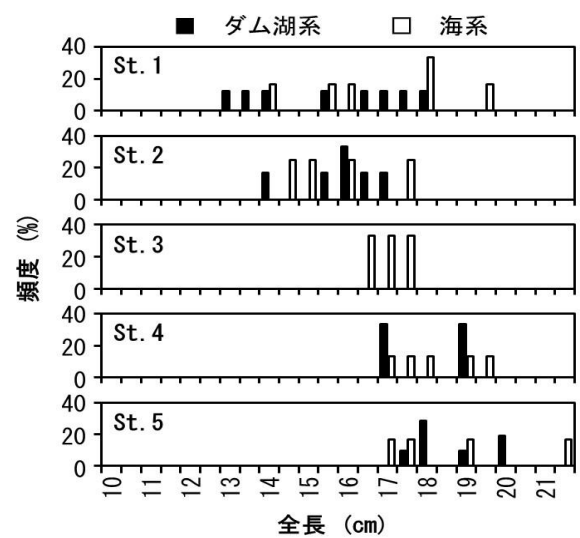


図4 2019年8月7日小田川において再捕されたアユの全長組成. 下流から順に St. 1-5

## III その他

### 1 執筆者

寺本 航

### 2 成果を得た課題名

(1) 研究期間 平成30年度～令和2年度

(2) 研究課題名 内水面漁業の復活に向けた種苗生産・供給技術に関する研究

### 3 主な参考文献・資料

(1) 三浦ら, 人工アユ種苗の遊漁資源としての特性評価: 同一環境で継代飼育された2系統間の比較, 日本水産学会誌, 78(6), p.1149-1158, 2012.

本研究は「食料生産地域再生のための先端技術展開事業のうち現地実証研究委託事業(農水省)」の成果である。